



2021年6月18日

報道関係各位

第1回緊急事態宣言期間中の都民の新型コロナウイルス感染症予防行動を調査 行動科学的な観点から公衆衛生上の重大な問題に対するアプローチを提案

上智大学（東京都千代田区、学長：曄道佳明）総合人間科学部心理学科の樋口 匡貴教授らの研究グループは、新型コロナウイルス感染症の対策として2020年4月に発出された緊急事態宣言の最中における、東京都民の感染予防・感染拡大予防行動と関連する認知の変数との関連に関する研究を行いました。その結果、外出や対人接触を回避する行動の増加および手洗い行動の増加について、以下の点が重要であることが示唆されました。

外出や対人接触を回避する行動の増加に影響する重要なポイント

- (1) その行動をすべきと明示されること
- (2) 多くの他者がそうしていると認知されること
- (3) その行動がリスク軽減に効果があり、かつ簡単にできると認知されること
- (4) その行動がリスク軽減に効果がない、あるいは簡単にはできないと感じている場合には、リスクそのものが強く認知されること

手洗い行動の増加に影響する重要なポイント

- (1) 手洗いをすべきであると明示されること
- (2) 面倒でなく、かつ簡単にできると認知されること
- (3) 新型コロナウイルスに脅威を感じていること

これらの成果から、「密を避ける」といった新型コロナウイルス感染症への予防行動がどのようなメカニズムで実行されるのかに関するより詳細な検討へとつながり、感染や感染拡大予防に有効な政策や指針策定へと発展することが期待されます。本研究成果は、2021年3月26日に学術雑誌「日本公衆衛生雑誌」への採択が決定し、6月11日にJ-Stageにて早期公開されました。

【論文名および著者】

雑誌名：	日本公衆衛生雑誌
論文名：	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間における予防行動の関連要因：東京都 在住者を対象とした検討
オンライン版 URL：	https://doi.org/10.11236/jph.20-112
著者：	樋口 匡貴（上智大学総合人間科学部）、荒井 弘和（法政大学文学部）、 伊藤 拓（明治学院大学心理学部）、中村 菜々子（中央大学文学部）、 甲斐 裕子（明治安田厚生事業団体力医学研究所）

【本リリース内容に関するお問い合わせ先】

上智大学 総合人間科学部 心理学科 教授 樋口 匡貴
E-mail : masataka.higuchi@sophia.ac.jp

«リリース発信元»上智学院広報グループ
E-mail: sophiapr-co@sophia.ac.jp

【背景】

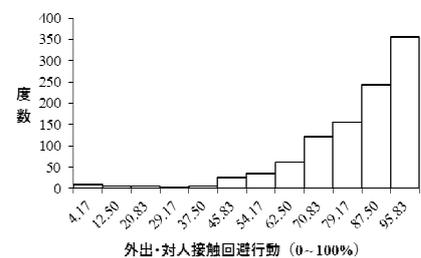
2020年4月に発出された緊急事態宣言期間中における都民の行動として、いわゆる「三密を避ける」行動（本研究では外出・対人接触回避行動と呼んでいます）および手洗い行動に注目しました。またこれらの行動との関連が予想される変数として、防護動機理論（Rogers, 1983）および規範焦点理論（Cialdini, et al., 1991）という2つの理論における変数を取り上げました。防護動機理論は、何らかの脅威やリスクを伴う事象に関連した行動のメカニズムを説明する理論であり、また規範焦点理論は、社会的な規範が人々の行動に及ぼす影響を説明する理論です。

【研究の方法と結果】

2020年4月26日～29日にかけてインターネット経由での調査を行いました。対象者はインターネット調査会社に登録しているモニタであり、学生を除く東京都在住の20～60歳代までの各年代約200人ずつ（男女半数ずつ）に募集を行いました。最終的な分析対象者は、1034名（女性514名、平均44.82歳、SD = 14.00歳）でした。

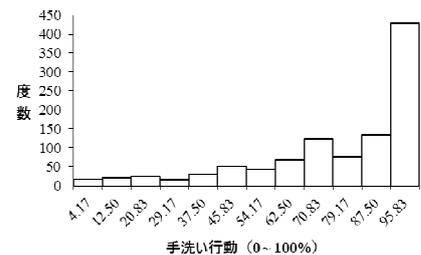
外出・対人接触回避行動（項目例「外出するとしても、なるべく人と会わないようにした」）および手洗い行動（項目例「頻繁に手洗いをしている」）については、最近1週間での実行の程度について0から100点の範囲を取る Visual Analog Scale という方法で尋ねました。また防護動機理論および規範焦点理論における変数（リスク認知の項目例「新型コロナウイルスへの感染が怖い」）については、「まったくそうは思わない」（1点）から「非常にそう思う」（7点）までの段階尺度で尋ねました。

分析の結果、この時期の東京都民は、かなり高いレベルで予防行動を実行していることがわかりました（右図）。またこれらの行動と理論的な変数との関連について、検討した結果、主に以下のようなことがわかりました。



外出・対人接触回避行動について

(1) 「外出は控えるべきである」「人との接触は控えるべきである」と考えるほど、行動が実行されていた。(2) 他の多くの人々が実行していると認識しているほど、行動が実行されていた。(3) 外出・対人接触を回避する行動をとれば新型コロナウイルスへのリスクを減らすことができ、かつ簡単にその行動が実行できると考えるほど、行動が実行されていた。(4) 外出・対人接触を回避する行動をとってもリスクを減らすことはできない、あるいは簡単には行動は実行できないと考える場合には、リスクそのものが強く認識されるほど、行動が実行されていた。



手洗い行動について

(1) 丁寧かつ頻繁な手洗いをすべきであると考えられるほど、行動が実行されていた。(2) 丁寧かつ頻繁な手洗いが面倒であったり、時間的余裕がないと感じるほど、手洗い行動は実行されていなかった。(3) 手洗い行動は簡単にできると感じるほど、手洗い行動は実行されていた。(4) 新型コロナウイルスは脅威であると感じるほど、手洗い行動は実行されていた。

【本研究成果の意義】

本研究はいわゆる因果関係を主張できるような研究のデザインではありません。また、インターネット調査モニタに限定された調査であることや、東京都民のみを対象にしていることなど、様々な限定があります。これらの限界点に鑑みると、本研究から即座に予防行動を増加させるのに有用な働きかけや政策を断言することはできません。しかし、どのような理論的な枠組みが検討の際に有用なのか、どのような変数が行動の変容に効果的だと推測されるのかに関する基礎的な研究材料の提供はできたと思います。今後の研究の発展にとって、重要な一步として位置づけられるはずです。

また私たちの研究グループでは、本論文の調査を含めこれまでに8回にわたるパネル調査を実施しており、今後も継続予定です。今後公表を予定している私たちのパネル調査の結果や、数多く積み重ねられつつあるコロナ禍における人々の行動メカニズムに関する心理学的・行動科学的研究の成果を併せることで、公衆衛生上の重大な問題に対する行動科学的な観点からの解決策を提案できるものと信じています。